

# —〈全学評創出と労働組合運動〉—

1970. 1. 24

▶ 68～69年に亘って学園斗争が昂揚し、労働戦線においても反戦派労働者による労働組合運動の新しい質的状況の創出は何を意味していたのだろうか。支配者階級によって、そして労働運動の「指導部」によって騒がれ支配秩序から突出した反戦青年労働者の運動をそのまま「労学提携の相手」として考へる。そして自分自身の存在も反戦派労働者の位相に置くものとして運動を進める。

▶ 反戦派労働者が反戦斗争にどのような高度に近代化される資本主義、再編される帝国主義のなかで、資本力による包摂された組合運動から離脱した反戦労働者の革命斗争の現実的内容は何んであったのか？  
生産点における拒否斗争、「指導部」の大家から個人個人における運動展開が自己における力量の一切関係を作り出したと考へる。—(現実的内容)

▶ 学内教育労働者に対する運動としては、反戦派労働者が突出した運動の意味を客観的に明らかにして行き組織至上主義的組合から人間変革への組合へ脱皮させて行く方向が考へられる。

1) 組合が公表した、大学問題調査会の答申の根本的批判。

2) 「平和と民主主義」「統一と団結」に象徴される組合の体質を告発する。

3) 組合運動と自己査検 → 主体性の回復と意識変革。

4) 新しい運動とに当面、生田反戦結成への展望、→ 地区共斗へ(地域共斗)

5) 学外反戦労働者との連帯。→ (情況交換 討論会) — 全都助手共斗との関連  
末分化?

6) 労働運動の再編成過程を積極的に捉え、組合運動そのものに新しい質を与える。 → 既成組合の分解を計る。

7) 労働組合運動の階級的質と戦闘性を如何に表出したから永續斗争を展開するか。 → (反合、反組合、対権力 etc)

以上